

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認第第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可毎月一日発行
平成二十年九月一日発行(第四百一十一号第九号)

ホトトギス

九月号



俳句随想 〔三百十五〕

汀子

最近、選句をしていると気になる表現があつて、そこで選句の手が止まつてしまう。桜の頃に出てくる表現で「花びら」が季題として使われている。そのまま一句を捨てるのが惜しい場合は「花屑」として採用する。又、「花筏」もある。広辞苑で引くと①花が散つて水面に浮び流れるのを筏に見立てていう語。②紋所の名。花の枝を折りそえた筏の文様。③おしろい下に用いた油性香料の名。④ミズキ科の落葉低木。各地の山地に自生。……初夏、葉の上面の中央に淡緑色の小花をつけ、これを、花を乗せた筏に見立てる。など多くの意味がある。使い方によつては情が添う季題であるが、花筏という別の植物の名としても成立するような一句もかなりある。安易に「花筏」を使うのは賛成出来ない。

新しい表現はすぐに流行するが、どのことを言っているのか分かるような一句にしなければならぬであろう。前にも何度も言っているが、「新樹光」「若葉光」「晩夏光」などと何にでも光をつけるのが流行っている。光と言わなくても、「新樹」「若葉」と言うだけで明るい光を感じる。流行の表現はすぐに飽きが来る。季題を大切にしてい一句の働きを季題に語らせることを忘れてはならないであろう。

句日記 汀子

平成十九年九月一日 菅屋ホトギス

風あれば凌ぎ易き日赤のまま
日本は地震多き日露けしや
蜻蛉の空蜻蛉の空の上

九月二日 関西野分会

コヤモスの咲き乱るといふ至福
冷やかや被災地の跡遺されて
コスモスの高さを渡る風の色
追悼の心華やぐ秋桜

九月二日 下萌句会

すぐ眠くすぐ怠けたく夜学かな
芒揺れ芒の影も揺れてをり
とんぼうの空の軽さは風のをり
穂をふむ芒まだまだ伸びさうに

九月三日 ロイヤル俳壇

うすくとなきが如くに秋の雲
鈴虫の命の音色夜をこめて
秋簾巻かれては又下ろす雨
大気澄みはじめて秋の雲となる

九月八日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

露の世のこの快晴をもて祝ふ
名園の爽やかといふほかはなし
露けしや忌日を旅にあることも
九月十一日 大阪倶楽部

どこまでも花野といへば言へさうに
さつきまでありし夕月消えてをり
虫聴いてありて草原の風を聞く
いき込みの半分ほどの夜長かな
旅の音の中に家路のあるところ
旅疲れ消えて夜長の家居かな

九月十一日 綿業倶楽部

台風の残せし風に着陸す
台風を離るる旅路盛会に
台風の空のつづきにあるきけり
穂を見せぬ芒の丈のなびきけり

九月十三日 清交社

二三人寄れば月見の心かな
観月会とは大層な五六人
今年又月見の誘ひには乗れず
一行の月見の誘ひそへし文
旅終へし日より満ちゆく月となる
ひるがへりやりが帰燕の群となる

九月十四日 工業倶楽部

その細き音色はたしか草雲雀
台風と同じ航路となりしこと
コスモスの風となりたるどころかな
自らをたのむ決断秋桜

九月十五日 句会と講演の会

手の窪に掬へばこぼれ秋の水
子規忌供華とのへしより向かふ墓所
供華活けて子規忌華やぐものとなる
無月とは分つてゐても又仰ぐ

九月十六日 野分会

風止んで風止んで色秋桜
冷やかに仕風の山に對しけり
コスモスの風の中より飛ぶものも
冷やかなことばの外にをりにけり

九月十八日 有恒倶楽部

露しとど三瓶の旅に濡るとも
全体に風疎に密に女郎花
雨添うて山吹き下ろす野分かな
ほどほどといかぬ仕事も露けしや
草の露朝の時間の経ち易く

九月十八日 祝笠寺五百号

笠寺の秋草を壺に溢れしめ
九月十八日 無名会
高きものより風誘ふ秋の草

九月十九日 夏潮句会

窓開けて夜長の風と入れ替ふる
野を過り手に秋草の二三本
風誘ふ山路うろろ秋の草
やうやくに夜長の稿のまとまりぬ
稿値のための夜長と思ひけり

九月二十日 時雨会

身ほとりに忌日の多き九月かな
もたらせし秋も芒も庭のもの
雲失せて臥待月の欠け初むる
来客を案内残暑をねぎらひて
花野行くとときは紛れ草の丈
ふみ込みて花野の歩幅ありにけり

九月二十一日 時雨会

しとど露ふふみし朝の草原に
紅赤紅控へ目といふ目立つも
紅差して夜のまどぬや吾亦紅
近づけば野に紛れたる吾亦紅
改修の星露けき光放ちけり
蟻螂のみどり紛れぬ動きかな

九月二十二日 祝さわらび主宰

さわらびに力漲りゆるける秋
九月二十七日 きさらぎ会
衣被皮の外れぬ一とこ
稿値も器用し器用衣被

九月二十九日 東海ホトギス同人会

秋霖の視界迷はぬ目的地
秋風に潮荒き日もありぬべし
秋潮の潮荒き日鳥島の物語
爽やかな旅秋霖に降られても

東海ホトギス俳句大会前日句会

降らるるも夜長の心ありし旅
空仰ぎ寝待の月をあきらめず
冷やかに一人歩きをせし言葉
九月三十日 東海ホトギス俳句大会
霧深き旅の朝のはじまりぬ
露けくも時間通りにこと運ぶ

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年九月一日 夢三忌全国俳句大会

雨傘の色も加へて大花野

九月五日 一水会

ビルの先二百十日に戦けり
秋の宵もう宴会は佳境なる

九月六日 蕉心会

雨男今日は台風男かな

台風のために出席叶ふ君
南の空台風に明け渡し

タイガース二位になりたる九月かな
台風に背く風あり流れあり

わてほんま台風に好かれてまんねん
台風に水面凹んでをりにけり

康生忌順三忌 瀬祭忌かな
台風を物ともせず集ふ句座

九月七日 六甲会

竹の春てふ一塊の裏鬼門
すくすくとすくすくと竹の春

都心てふ喧騒他所に鉦叩
鉦叩星に聞かせる衆ならん

鉦叩六甲おろしめくりズム

九月七日 虚子記念文学館投句

台風に新幹線立ちつばなし

九月九日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

タイガースいよよ高きに登りけり
秋の蟬三百年を語り継ぐ
城といふ露けき黒でありにけり

九月十日 朝日カルチャー若草句会

七草の一人花見つけるほどの幸
夕月夜見上げ帰宅の人の黙

慎ましさてふ七草の主張かな

夕月夜見下ろしてゐる十連勝
子規偲ぶとは七草を活けてより

九月十三日 土筆会

葛の花咲けば暮れゆく吉野かな
白露の日忌日は美しき思ひ出に

九月十四日 百夜句会

秋の蟬ちよつと遅すぎるとちやふ
西鶴忌昭和の恋も古りにけり

升さんの愛せし女 瀬祭忌
正面に街騒背_ナに虫時雨

九月十五日 ホトトギス社句会

瀬祭忌今日阪神勝つぞなもし
爽やかな四対一といふ点差

爽やかなやかぐやてふ名の宇宙船
水澄むや虚子も歩きしこの辺り

爽やかな稲城野の一句会かな

その中に魂宿し水澄めり

九月二十二日 登高会老柳山荘吟行会

秋の雲ホテルマウント富士白垂
山湖従へ初雪の富士消ゆる
富士薊今満開といふ気品
秋灯のスイツチ探すより山盧
背比べ文字の露けく消えかかり

九月二十五日 若水句会

酒といふ灯下親しき葉かな
秋灯下机上に稿の堆く

月を恋ふ時には何時も君が居て

秋灯を灯せば山盧てふ出会ひ
虫の闇こんがらがつてゐる話

月の道とは故郷の香りして

九月二十六日 目黒学園句会

草の花分けて翔ぶもの這へるもの
鬼灯を鳴らせば羽音ついて来る

草の花風に逆らふ術知らず
冷やかな受付嬢でありにけり

鬼灯や頬ばつかりが膨みて

九月二十八日 笠寺五百号祝句

天高し伝統といふ未来あり
冷やかに大橋伸びてをりにけり

発車ベルてふ秋の声聞いてをり
地虫鳴くより旅心里心

水嵩といふ秋霖の忘れ物

雑詠

廣太郎 選

眺めぬし花の雲へと我も消えん 長岡 安原 葉
 峡暗し吉野の六日月朧 同
 東京の夜景に小さき朧月 同
 月もまた花にさまよふ吉野山 神戸 山田弘子
 たまゆらの露解きそめし朝桜 同
 花の蜜吸ふ一鳥のふと羨し 同
 葉桜の公園巡り来て憩ふ 福岡 松尾緑富
 ほととぎすここに聞かんと岩に腰 同
 ほととぎす一声高く後聞かず 同
 草餅を焼き確かむる野の記憶 榎原 稲岡 長
 暁に浮かびて白し庭桜 同
 片々と花こぼれみて静かかな 同
 乗り継ぎて花の切符は吉野行 東京 大久保白村
 百歳の我に朝寝の夢で逢ふ 同
 花の旅別れに欲しきロスタイム 同
 思ひあらた花鳥諷詠大虚子忌 たつの 浅井青陽子
 句心をいよいよ深め椿寿の忌 同
 つづけざま音のありたる落椿 同

陽炎や畑の青揺れ黄色揺れ 八尾 岩垣子鹿
 亀鳴いて入山料は五百円 同
 雨霧ふ大和は美し燕来る 同
 日本に花下てふ異空間のあり 東村山 村松紅花
 一御陵一老鶯の領し鳴く 同
 落花踏み浅間に残る雪仰ぎ 同
 縄跳びの縄に叩かれ地虫出づ 相模原 木村享史
 梅寒し首をすくめて人も鳩も 同
 きれいとはいへざる池や蝌蚪の紐 同
 み吉野の花の呪縛の面々よ 神戸 千原叡子
 亀鳴くと逢魔が時を戻り来し 同
 帰路に又立寄る茶房日の永し 同
 天も地も人も呪縛の花の日々 宝塚 水田むつみ
 風よりも灯色にこぼれ糸桜 同
 旅つづけ吉野に果てし花行脚 同
 一束のどれかが折れてカーネーション 香川 湯川 雅
 車前草の花しならせし風へ鞭 同
 海月浮く基本の円を歪ませて 同
 囀に耳より覚めてゆきにけり 龍ヶ崎 今橋真理子
 花びらは地に囀は空へ散り 同
 再会に似て去り難き花下の墓 同
 花の道たどれば展け吉野山 東京 川口利夫
 花の上花の上へと花つゞく 同
 如意輪寺より谷深く散りし花 同

雑詠句評（八月号より）

暮潮・仁義・一步
弘子・比奈夫・純也
しげ人・昭代・くに彦
雅・廣太郎

虚子遺墨守りし花の弘秋居 大田 波多野弘秋

この句の大きい特徴は「弘秋居」と自分の名前を句に入れたことであろう。虚子先生の句には、例えば「虚子一人銀河と共に西へ行く」などのようにいくつかの例があるが、他の俳人には極めて珍しい。ふつうの俳人にはたいへん使い難いことばだと思いが、あえて使ったのはいくつかの理由がある。

そのためには「大田」という地名がぜひ必要かと思う。（もともと俳句とは地名人名を考えて鑑賞すべきものだろう。『中国・四国道路地図』（昭文社）の解説によれば、山陰道の出雲平野を抜け、西に進むと国道九号線の左手に、なだらかな草に覆われた三瓶山が近づく。この山は国引きの柱といわれる神話の山で、今は牛が牧歌ムードを漂わせる。この山は標高一二六mの男三瓶を主峰に、三瓶の名を冠する四つの峰がつながり、ファンタスティックな霧の海が神話の舞台となった神秘さを満喫させてくれる。この三瓶山への入り口、石見路の玄関口にあるのが大田市だ。その大田市に虚子遺墨を守って弘秋さんが住んでいる。家に咲く何本かの花の時期に特にそのことが強く意識されるといった意味だろうか。ついでにもつと想像を働かしてみよう。その虚子遺墨とは、昭和一九年に亡くなった山本村家への虚子先生の弔句「これよりは山陰道の月暗し」ではなからうか。虚子先生の村家への情は「曩に泊雲逝き今又村家亡し」という後書きからもしのげられる。作者は泊雲村家なくも今、山陰ホトトギスに弘秋ありの心境なのではなからうか。（暮潮）

虚子を慕う心は、実際お会いになつた方もそうでない方も、この世界では皆お持ちだろう。又虚子の遺した遺墨は、今やこの上もない貴重なものとして、虚子記念文学館をはじめ個人も大切に保存されているのである。そんな逸品を守る姿が、季題の明るさを引き立てている。（廣太郎）

天地有情

子選

この花とこの月に寝る勿体なし
 驚や朝の脳細胞元氣
 人悼む言葉さがして遅き日
 人逝きて城残りたる弥生かな
 由良川の溪に朴咲く君知るや
 光る葉もみどりの蔭も五月かな
 涅槃西風はやも近づく一周忌
 チューリップ月の夜風と語りをり
 剪定に空も切られてゆきにけり
 線となり面となり、となる雲雀
 わが心かはれば薔薇の翳りたる
 奉る備後の酒や翁の忌
 よべは死をけさは薫風生思ふ
 囀の滅れば天変地異憂へ
 師の一語憑きてはなれず明易し
 年毎に虚子新たなり忌を修す
 春の蝶連れだち来しが空となる
 持ち帰りたる摘草の夜を匂ふ

神戸 山田弘子
 同 佐土井智津子
 大阪 同
 同 榎原 稲岡 長
 同 長岡 安原 葉
 同 東京 稲畑廣太郎
 同 福山 竹下陶子
 同 豊中 瀧 青佳
 同 たつの 浅井青陽子
 同 大阪 堀 告冬
 同

風止めば散ることも止み八重桜
 咲き重りして今日はあり雪柳
 すれ違ふどこかで見た子チューリップ
 朧月しばらく峡の空渡る
 これやこの浮世日曜市の春
 藍倉の並ぶまぼろし柳の芽
 泣き虫の子に風車よく回り
 小鳥にも好きな枝あり糸桜
 ベンチあり木苺の花前にして
 散策の木苺の花樂しみに
 あたたかや阿弥陀堂より人のこゑ
 花の雨堂守鍵を鳴らし来る
 垣越えて来し初蝶の息遣ひ
 一年生校歌の山へ遠足す
 囀つて花を散らさむ謀
 客人に欲しかり花の外籠
 吉野より遅日の帰路や雨も良き
 そのあとの落花はまぼろしのままに

熱海 嶋田摩耶子
 同 東京 今井千鶴子
 同 徳島 上崎暮潮
 同 仙台 小島左京
 同 福岡 松尾緑富
 同 熊本 岩岡中正
 同 相模原 木村享史
 同 神戸 後藤比奈夫
 同 同 長山あや
 同

天地有情句評

汀子

涅槃西風はやも近づく一周忌 長岡 安原 葉

一年が経ったとは思えぬ早さに慄ぶ兄上への弔意。

剪定に空も切られてゆきにけり 東京 稲畑廣太郎

空も切られて行くと見る感性。

わが心かげれば薔薇の翳りたる 福山 竹下陶子

心のままに薔薇も翳る自然。

よべは死をけさは薫風生思ふ 豊中 瀧 青佳

あるがままの体調に応える精神力。

年毎に虚子新たなり忌を修す たつの 浅井青陽子

年を重ねるたびに深く虚子を知る作者。

この花とこの月に寝る勿体なし 神戸 山田弘子
寝るのが惜しいとは最高の讃辞。

人悼む言葉さがして遅き日を 大阪 佐土井智津子

言葉では表現できない弔意。

光る葉もみどりの蔭も五月かな 樞原 稲岡 長

若葉が萌え出た美しき五月。

(以下略)